

平成 31 年度北九州市小児保健研究

「発達障害児支援のための 4・5 歳児健診のあり方を 探る（一次スクリーニング方法の検証）」

研究報告書

研究責任者

緒方怜奈 国立病院機構小倉医療センター 小児科医師

研究協力者

渡辺恭子 国立病院機構小倉医療センター 小児科医長

山下博徳 国立病院機構小倉医療センター 院長

安永由紀恵 国立病院機構小倉医療センター 小児科医師

【研究背景】

発達障害児やその境界域の子ども達に対しての早期支援は、将来的な社会生活への適応をより良くすることが知られている。しかし、現在北九州市においては、3歳児健診後、小学校入学まで健診がなく、小学校入学後の問題行動で発達障害に気づかれる児が一定数いるのが現状である。

【目的】

より多くの就学前児を対象とした発達障害児の早期発見・支援のためには、保育園・幼稚園における園医による4・5歳児健診の場が一次スクリーニングとなることが有用と考えられる。多人数を対象とするため、そのための簡易なアセスメントツールが必要である。今回、強さと困難さ質問表(SDQ:Strength and Difficulties Questionnaire)を用い、その質問表が本市において有効な手段となりうるかを検証する。

【対象と方法】

市内の保育園のうち、協力可能な施設において、園児(4-5歳)の保育者と保護者に対し、強さと困難さ質問表(SDQ:Strength and Difficulties Questionnaire)を用いてアンケート調査を行い、結果を分析した。地域に偏りがないように、すべての区の保育園に調査を行った。なお、対象者の保護者には、書面で研究の主旨及び匿名性の保証等の倫理的配慮について説明した。

強さと困難さ質問表(SDQ:Strength and Difficulties Questionnaire) (下表参照)

SDQは行動スクリーニング質問紙で、「向社会性」、「多動性」、「情緒」、「行為」、「仲間関係」の5領域25項目で構成されている。各項目を「あてはまる:2点」「まああてはまる:1点」「あてはまらない:0点」で評定し、向社会性を除く4領域でTDスコア(Total Difficulties Score, 全般的困難度)を算出する。向社会性以外の各領域およびTDスコアの合計点は、得点が高いほど適応が困難であることを示し、向社会性は得点が高いほど適応が良いことを示す。TDS及び各領域の得点に応じ、支援の必要性を「High Need:おおいにある」、「Some Need:ややある」、「Low Need:ほとんどない」の3つに分けて運用する(下表参照)。「High Need:おおいにある」、「Some Need:ややある」がそれぞれ10%程度になるようにカットオフ値を設定する。東京都では、希望者の5歳児健診時の行動評価として使用されている。

	まあ あてはまらない あてはまる あてはまる		
他人の気持ちをよく気づかう	☐	☐	☐
おちつきがなく、長い間じっとしてられない	☐	☐	☐
頭がいたい、お腹がいたい、気持ちが悪いなどと、よくうったえる	☐	☐	☐
他の子どもたちと、よく分け合う（おやつ・おもちゃ・鉛筆など）	☐	☐	☐
カッとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある	☐	☐	☐
一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い	☐	☐	☐
素直で、だいたい大人のいうことをよくきく	☐	☐	☐
心配ごとが多く、いつも不安なようだ	☐	☐	☐
誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしているときなど、すすんで助ける	☐	☐	☐
いつもそわそわしたり、もじもじしている	☐	☐	☐
仲の良い友だちが少なくとも一人はいる	☐	☐	☐
よく他の子とけんかをしたり、いじめたりする	☐	☐	☐
おちこんでしずんでいたり、涙ぐんでいたりすることがよくある	☐	☐	☐
他の子どもたちから、だいたい是好かれていよう	☐	☐	☐
すぐに気が散りやすく、注意を集中できない	☐	☐	☐
目新しい場面に直面すると不安ですがりついたり、すぐに自信をなくす	☐	☐	☐
年下の子どもたちに対してやさしい	☐	☐	☐
よくうそをついたり、ごまかしたりする	☐	☐	☐
他の子から、いじめの対象にされたり、からかわれたりする	☐	☐	☐
自分からすすんでよく他人を手伝う（親・先生・子どもたちなど）	☐	☐	☐
よく考えてから行動する	☐	☐	☐
家や学校、その他から物を盗んだりする	☐	☐	☐
他の子どもたちより、大人という方がうまくいくようだ	☐	☐	☐
こわがりで、すぐにおびえたりする	☐	☐	☐
ものごとを最後までやりとげ、集中力もある	☐	☐	☐

* 日本における保護評価の標準値 (4-12 歳、2899 名のデータから分析)

	Low Need		Some Need		High Need	
	スコア	exact%	スコア	exact%	スコア	exact%
TD スコア	0-12	80.6	13-15	9.9	16-40	9.5
行為	0-3	84.3	4	8.6	5-10	7.1
多動・不注意	0-5	83.6	6	6.8	7-10	9.7
情緒	0-3	84.3	4	7.2	5-10	8.5
仲間関係	0-3	90.1	4	5.5	5-10	4.4
向社会性	6-10	71.2	5	15.5	0-4	13.3

厚生労働省のホームページ (Matsuishi et al. Brain & Development 2008;30:410-415.)

【結果】

1. 地域別施設数と回収人数、回収率

	施設数	依頼人数(名)	回収人数(名)
門司	4	75	74
小倉北	6	128	122
小倉南	6	121	107
戸畑	3	58	52
八幡東	5	82	74
八幡西	4	72	68
若松	3	53	44
計	31	589	541

回収率 92%

2. 対象の特徴

- ① 平均年齢 59.7 か月
- ② 性別 男児 296 名(54.7%)、女児 244 名(45.2%)、不明 1 名(0.2%)
- ③ 調査時点での支援の有無
有り 42 名(7.8%)、無し 473 名(87.4%)、不明 26 名(4.8%)
- ④ 第何子か
第 1 子 251 名(46.4%)、第 2 子 190 名(35.1%)、第 3 子 73 名(13.5%)、第 4 子 19 名(3.5%)、第 5 子 5 名(0.9%)、不明 3 名(0.6%)

3. 評価者の特徴

- ① 保護者
父親 23 名(4.3%)、母親 503 名(93%)、その他 8 名(1.4%)、不明 7 名(1.3%)

② 保育者

保育士経験年数				
年数	保育士数(名)	%	記入児数(名)	%
5 未満	2	5.3	22	4.1
5-10 未満	10	26.3	144	26.6
10-15 未満	9	23.7	153	28.3
15-20 未満	5	13.2	74	13.7
20-25 未満	6	15.8	77	14.2
25-30 未満	2	5.3	22	4.1

30-	4	10.5	49	9
計	38	100.1	541	100

5 歳児クラスの経験				
年数	保育士数(名)	%	記入児数(名)	%
1	8	21.1	99	18.3
2	4	10.5	70	12.9
3	7	18.4	88	16.3
4	4	10.5	58	10.7
5	4	10.5	78	14.4
6	4	10.5	52	9.6
7	2	5.3	30	5.6
8	1	2.6	11	2
10	3	7.9	35	6.5
13	1	2.6	20	3.7
計	38	99.9	541	100

4. SDQ 結果

① TD スコアで判断した支援が必要な児の頻度

	Low Need	Some Need	High Need	計
TD スコア	0-12	13-15	16-40	(人)
保護者評価(人)	364	75	84	523
%	69.6	14.3	16.1	100
保育者評価(人)	369	65	97	531
%	69.5	12.2	18.3	100

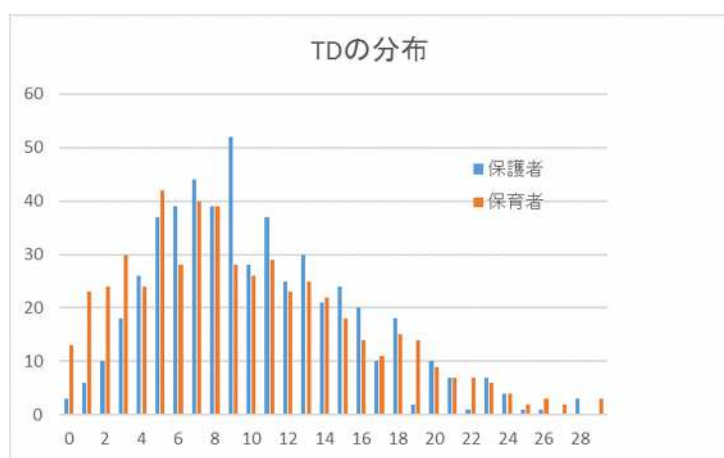
② 保護者・保育者別、および男女別の TD およびサブスケールの平均値と SD

		行為	多動	情緒	仲間関係	向社会性	TD
保護者評価 全体	平均値	2.93	3.8	1.81	1.68	6.52	10.2
	SD	1.99	2.35	1.75	1.47	2.09	5.29
保護者評価 男子	平均値	3.02	4.15	3.23	1.64	6.2	10.43
	SD	2.09	2.33	1.63	1.53	2.21	5.45
保護者評価 女子	平均値	2.84	3.4	2.04	1.75	6.93	9.92
	SD	1.86	2.33	1.89	1.4	1.92	5.14
保育者評価	平均値	2.31	4.11	1.91	1.42	5.98	9.73

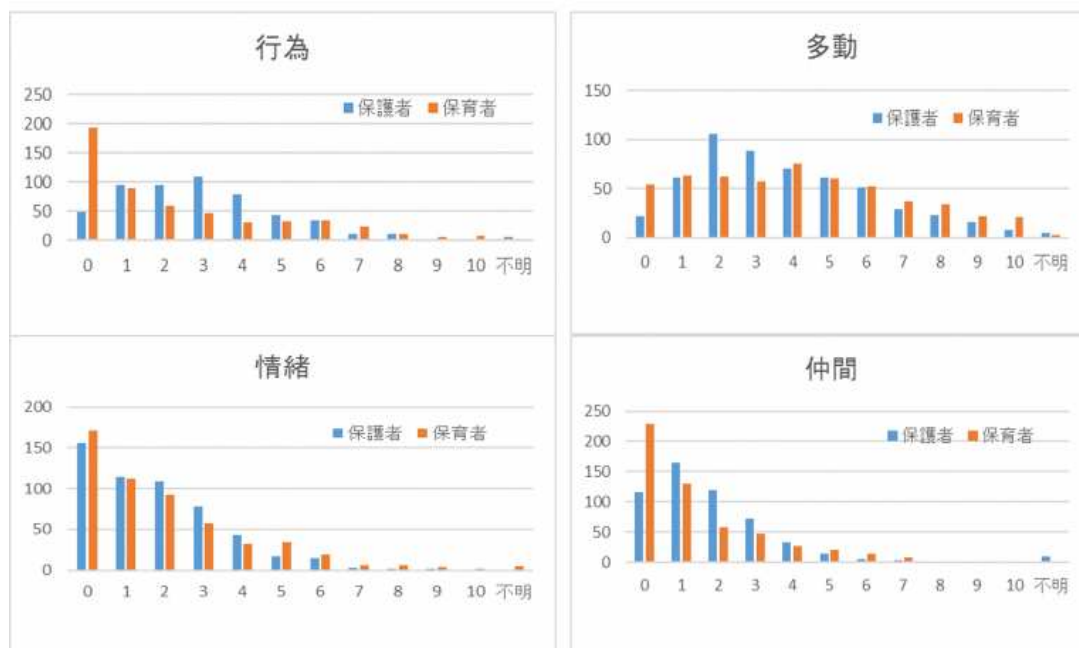
全体	SD	2.62	2.78	2.06	1.79	2.56	6.25
保育者評価 男子	平均値	2.63	4.77	1.69	1.55	5.55	10.66
	SD	2.66	2.75	1.12	1.88	1.48	6.25
保育者評価 女子	平均値	1.95	3.33	2.17	1.28	6.49	8.61
	SD	2.38	2.63	2.19	1.32	0.83	6.08

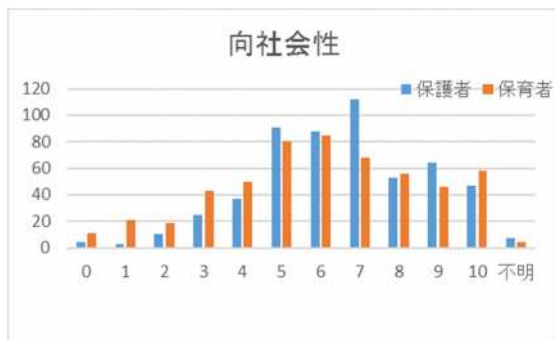
③ TD スコアおよび下位項目点数の保護者・保育者別分布
いずれも縦軸が人数、横軸が点数の分布を示す

<TD スコア>

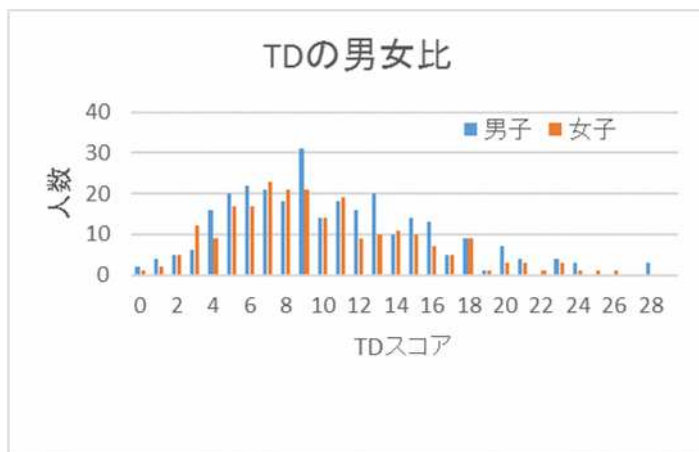


<サブスケール>

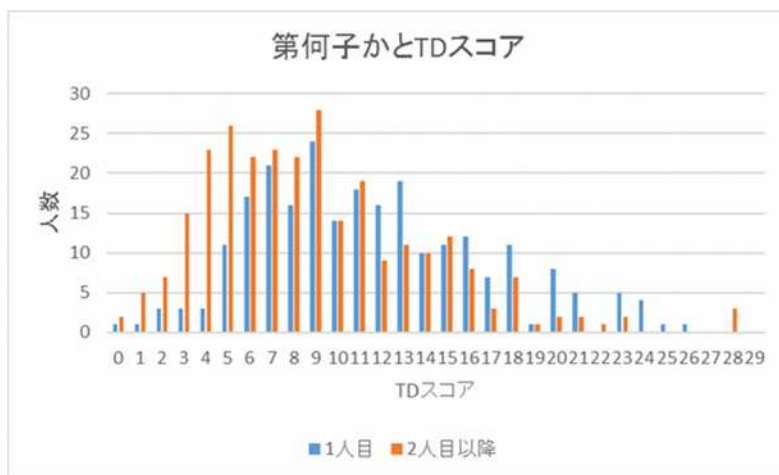




④ 保護者による男女別 TD スコア分布



⑤ 保護者による長子か長子以外か別の TD スコア分布



⑥ 年齢別（5歳未満か以上か）の平均値と標準偏差

		TD	行為	多動	情緒	仲間関係	向社会性
5歳未満	平均値	9.5	3.00	4.07	1.83	1.75	6.39

n=248	標準偏差	5.37	2.09	2.37	1.76	1.52	2.09
5歳以上	平均値	9.76	2.88	3.58	1.80	1.64	6.64
n=287	標準偏差	5.22	1.90	2.32	1.76	1.43	2.10

⑦ 保育士経験年数、5歳児クラス経験年数別の TD スコア

保育士経験年数と TD スコア		
TD スコア	15 年未満	15 年以上
0-12	227(72%)	142(66%)
13-15	41(13%)	24(11%)
16-	47(15%)	50(23%)
合計 (人)	315	216

5 歳児クラス経験年数と TD スコア		
TD スコア	4 年未満	4 年以上
0-12	186(75%)	183(66%)
13-15	27(11%)	38(13%)
16-	35(14%)	58(21%)
合計 (人)	248	279

⑧ 保護者・保育者評価のサブスケールの既知報告(保護者のみ)との比較

		Low Need (本研究)		報告	Some Need (本研究)		報告	High Need (本研究)		報告	合計
		数	%	%	数	%	%	数	%	%	数
行為	保護者	350	65.5	84.3	79	14.8	8.6	105	19.7	7.1	534
	保育者	390	72.4		31	5.8		118	21.9		539
多動	保護者	409	76.3	83.6	51	9.5	6.8	76	14.2	9.7	536
	保育者	372	69.1		52	9.7		114	21.2		538
情緒	保護者	457	84.6	84.3	43	8	7.2	40	7.4	8.5	540
	保育者	433	80.8		32	6		71	13.2		536
仲間関係	保護者	473	89.1	90.1	33	6.2	5.5	25	4.7	4.4	531
	保育者	467	86.5		27	5		46	8.5		540
向社会性	保護者	364	68.2	71.2	91	17	15.5	79	14.8	13.3	534
	保育者	313	58.3		80	14.9		144	26.8		537

【まとめ】

・北九州市においては、支援の必要性が高いとされる High Need の児が、保護者 16.1%、保育者 18.3%と高率であった。

- ・ TD スコアの分布に、保護者と保育者間では有意差はなかった。
- ・ サブスケールでは、保護者と保育者間に行為、仲間関係、向社会性で有意差を認めた。
- ・ TD スコアは保護者で平均値が高く、保育者でばらつきが大きかった。
- ・ 男子の方が TD スコアの平均値が高かった。
- ・ 長子の方が TD スコアが高かった。
- ・ 保育士の経験年数、5 歳児クラス経験年数が長い方が、TD スコアが高い傾向にあった。

【考察】

北九州市においては、保護者・保育者ともにこれまでの報告より、TD スコアが高い傾向にあった。なかでも、「行為」「多動」の項目において「High Need」の数が多いことが特徴的で、反抗や反社会的行動などの行動面、集中力の欠如や多動性などの多動と不注意の面に関心が高いことがうかがわれた。当市での特徴に配慮し、TD スコアのカットオフ値を調整することで、SDQ は 4・5 歳児健診における一次スクリーニングとして有効な手段となりうる考える。

謝辞

アンケートの集計に多大なご協力を頂きました北九州市保育士会の先生方に心より御礼申し上げます。

【参考文献】

Matsuishi et al. Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): A study of infant and school children in community samples. *Brain & Development* 2008;30:410-415

飯田悠佳子ら．“わが国の就学前幼児(4-5 歳)における保護者及び担任評定にもとづく Strength and Difficulties Questionnaire の標準化”．平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「就学前後の児童における発達障害の有病率とその発達の変化：地域ベースの横断的および縦断的研究」総括・分担研究報告書．2014;33-41

社団法人東京都医師会次世代育成委員会編．5 歳児健診事業―東京方式―．東京都医師会．2010;47(3):187